



日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

東アジア海文明の歴史と環境

ニュースレター



海雀

Umi-Suzume

第3号

2007. 6. 25

「東アジア世界ネットキャンパス授業」 鶴間和幸	(2)
平成 19 年度第 1 回東アジア海文明セミナー	
「中国史에서 環境과 災害 (中国史における環境と災害)」 下田誠	(3)
「泉州およびアモイの港湾都市機能・景観調査」 森部豊	(4)
「韓国水利遺跡現地調査記」 村松弘一	(5)
「2007 年度学習院大学アジア研究教育拠点事業 報告会・座談会筆記録(前編)」	
(6)	
「清朝の海禁政策の性格」 洪性鳩	(10)
「羅唐戦争の終結について」 李相勲	(11)
「随想 東京滞在記」 楊偉兵	(12)
「学習院大学図書館「清帝勅誥命書」について」 承志	(14)
「日韓交流遠隔セッションの試み」 小林彰雄	(16)
彙報	(17)
「コラム 東アジア海にまたがる橋 —インターネットテレビ会議システムを使った授業—」 放生育王	
(18)	
編集後記	(19)

学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1 tel: 03-3986-0221 (内線 5743)

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

東アジア世界ネットキャンパス授業

学習院大学文学部教授 鶴間 和幸

この4月から学習院大学西2号館201の大教室にテレビ会議システムが設置された。これまでは人文科学研究所内の会議室に設置し、中国、韓国側とのプロジェクトの会議に利用していたが、新たに設置されたシステムによって、これからは双方向の講義が可能になった。4月27日東洋文化研究所の村松弘一氏と慶北大学校李文基氏との日韓コラボレーション授業「東アジア海を越える稲作技術一池の文化」が行われた。まずはこちらから韓国側に講義を発信した。先方の教員と学生たちはあらかじめハングルに訳した概要を手に入れているので、通訳は入れなかった。講義が終わると、それに対するコメントを李文基、禹仁秀両氏からいただいた。通訳は東洋文化研究所の李正勲氏にお願いした。データの送付、プロジェクター画像の色彩の調整など問題点も残したが、第一回目としては上々であり、学生たちの関心も高まった。双方の学生の対話も実現した。

通信を利用して遠隔地の相手の画像を見ながら双方向でコミュニケーションを行うテレビ会議が、近年企業や大学で少しずつ始まっている。学習院大学に設置したのはインターネット・ランによるアメリカポリコム社のテレビ会議システムVSX8000である。まずIPアドレスで先方にダイヤルして接続する。写真では人文科学研究所の50インチの液晶テレビに3地点の画面が映し出されている。左上に慶北大学校、右上に西2号館の教室、下は人文科学研究所会議室、左下にあるのはカメラ、テレビの真下にあ

るのはテレビ会議システムの本体。西2の教室ではプロジェクターで拡大した画面を見ることができる。

学習院大学の教室にも新しい時代の到来を印象づけた。金曜日4講時の総合基礎科目「東アジア世界」は文学部・経済学部に関講し、これまでは中国音楽の授業を5年間続けてきた。今年度は「東アジア海文明の歴史と環境」のテーマで、5名の講師で担当することにした。アジア研究拠点事業の研究の成果を、鶴間ほか村松弘一・市来弘志・菅野恵美(ともに学習院大学非常勤講師)各氏が講義していく。そして特別講師としてNHKエグゼクティブ・プロデューサーの井上隆史氏も6回参加する。大黄河・始皇帝・四大文明・新シルクロードなど中国で取材制作された仕事を、映像を見せながら講義してもらおう。すでに大黄河取材の2回の講義は大変興味深かった。黄河源流を求めて決死の取材を敢行し、また黄土高原では乾燥した土壌に生きる貧しい農民の心情にまで迫ったことなど、熱く語ってくれた。後期には韓国に向けても井上氏の講義を発信する予定をしている。

インターネット回線による画像は、まだ十分鮮明とはいえない。しかし日本と上海のプロバイダー間には専用回線も引かれているという。システムより技術は大変な勢いで進歩しているので、今後は双方から鮮明な映像資料を送り、それをもとに議論できるようになる日も近いであろう。



ネットキャンパス画面

平成 19 年度第 1 回東アジア海文明セミナー 「中国史에서 環境과 災害 (中国史における環境と災害)」

学習院大学文学部特別研究員 下田 誠

2007 年 4 月 14 日、韓国・清州の忠北大学校人文大学において、本事業と中国史学会の共催になる国際学術シンポジウムが開催された。

当日は中国史学会の全淳東会長と学習院大学の鶴間和幸教授の祝辞により始まったが、両氏ともに中国語と韓国語両言語による挨拶をおこない、国際学会ならではの緊張感を味わうことができた。また報告は韓国人研究者 2 名以外すべて中国語でおこなわれた。

本事業からは村松弘一・濱川栄・森部豊が個別報告をおこない、市来弘志・福島恵・下田誠は 2006 年度の「東アジア海文明の歴史と環境」の活動報告をおこなった。

村松は古代東アジア史の中に池の研究を位置づけるべく研究・調査を進めているが、とくに敷葉工法という技術とその伝播に注目している。報告には昨年、12 月末に実施された碧骨堤などの韓国水利遺跡調査の成果が生かされていた。また濱川は「中原」概念の形成をたどり、漢代までを対象とした時、その定型な見方に注意を喚起する。濱川らは昨年夏期に「邗溝」の名残をとどめる「大運河」を航行しているが、この地（江淮）を舞台に抗争した呉越もまた自ら「中原」に言及することは興味深い。なお、会場を異にした森部の報告は拝聴できなかったが、予定時間を超えて、活発な議論を展開していた。

市来・福島はそれぞれ黄河下流班・海港海運班の調査成果を報告し、下田は事業の概要を紹介した。総じて共同主催というにふさわしい充実した内容で、日中韓三国の研究者が集う場において、「東アジア海文明の歴史と環境」プロジェクトの活発な活動を報告できた意義は大きい。本セミナーは次につながる一つのモデルを提示したといえるだろう。

*本セミナーは「中国史学会」としては第 54 回学術発表会にあたります。



< 開会式 >

開会辞 中国史学会・会長 全淳東

祝 辞 忠北大学校・総長 林東喆 / 鶴間和幸 (日本・学習院大学)

< 1 部 発表会 >

◇第 1 分科◇ 司会: 崔徳卿 (韓国・釜山大学)

1. 報告: 村松弘一 (日本・学習院大学) 討論: 閔厚基 (韓国・忠南大学)

「古代東アジア史のなかの陂一水利技術と環境」

2. 報告: 濱川栄 (日本・早稲田大学高等学院) 討論: 金錫佑 (韓国・群山大学)

「中国古代史における『中原』の位置と意義」

3. 報告: 鄭哲雄 (韓国・明智大学) 討論: 李俊甲 (韓国・仁荷大学)

「鉦山 開發과 環境—清代 湖南省 郴州 鉦山開發을 中心으로」

◇第 2 分科◇ 司会: 林炳徳 (忠北大学)

4. 報告: 文銀貞 (韓国・釜山大学) 討論: 文貞喜 (韓国・延世大学)

「前漢末의 疾病과 讖緯說」

5. 報告: 森部豊 (日本・関西大学) 討論: 鄭炳俊 (韓国・東国大学)

「魏晋南北朝隋唐五代遼時期の東アジア国際関係とソグド人外交」

< 2 部 発表会 >

6. 報告: 市来弘志 (日本・学習院大学) 福島恵 (日本・学習院大学) 下田誠 (日本・学習院大学)

「東アジア海文明の歴史と環境— 2006 年度調査報告—」

7. 招待講演: 陳智超 (中国・中国社会科学院)

「中韓兩國歴史文献整理的不同層次」

泉州およびアモイの港湾都市機能・景観調査

関西大学文学部准教授 森部 豊

港班は、福建省泉州およびアモイの港湾都市機能について、現地における景観調査および資料収集を目的とし、2006年12月29日から2007年1月6日まで調査をおこなった。

12月29日に上海から中国へ入国した港班は、12月30日の午前に福建省泉州市へ空路で移動し、泉州市海外交通史博物館を調査。ここで港湾都市としての泉州の歴史と概要を把握し、当博物館のみにて購入可能な泉州関係の書籍を入手することもできた。

12月31日、泉州西郊の調査。まず、磁灶鎮にある唐末から宋代の窯で日用品を作っていた金交椅山古窯遺跡を調査。窯遺跡の前に梅溪が流れ、往時はこの河川の水運を利用し、焼き物を搬出していたという。ついで、草庵寺院を調査。かつてのマニ教寺院の遺跡でマニ仏が現存する。泉州が宗教的にも国際都市であったことの例証を目で確かめることができた。次に調査したのは安平橋。最後に六勝塔。この塔は泉州湾に望む小高い丘の上にあり、かつては船乗りの目印になったものという。ここから目にした泉州湾の風景は、景観調査の名にふさわしいもので、地図上からは得ることのできない港湾都市・泉州の地理的景観を理解する上で大いに役に立った。

新年の気分の盛り上がりがない1月1日。この日は泉州市内を調査する。午前中は開元寺。寺院建築物の柱には、かつて泉州にあったバラモン寺院の遺構が使用されている。また東西にある二塔のうち、南宋再建の西塔のレリーフには、孫悟空なども見られ、西遊記成立に関する興味深い資料を提供している。この開元寺の境内には、古船陳列館があり、泉州湾から出土した宋代の木造船の遺構や同時に出土した当時の交易品目（香辛料など）が展示されており、泉州を拠点とする南海貿易の実態把握に有益であった。午後からは、宋代の市舶司の遺跡、イスラム寺院を調査。市舶司遺址は自力で探索したため、道に迷った。

1月2日、泉州市東郊にある明代に倭寇対策のために建築された崇武古城を調査。海岸ぎりぎりのところに建築された城砦であり、明朝の沿岸防衛の一端を垣間見ることができた。午後は洛陽橋を調査し、九日山へ。ここには宋代以来の碑刻が数多く現存する。中には航海の安全を祈念す

るものがあり、またその撰者に市舶司関係者の名も見え、泉州が交易拠点として栄えていた証左となる貴重なものである。

1月3日、廈門（アモイ）調査。泉州が唐末以降栄えた歴史ある港湾都市に対し、アモイは近代以降、急速に発達してきた港湾都市と位置づけることができる。アモイでは、共同租界のあったコロンス島、南普陀寺、胡里砲台を調査。コロンス島の日光岩山頂からは、アモイ港を一望できた。南普陀寺の背後は山になっており、その登山道の各所からアモイ湾および外洋の風景を一望することができ、海に直接面しているアモイの景観を調査することができた。また、いくつかの島が自然の防波堤となっており、アモイが天然の良港であることも確認できた。胡里砲台からは、中華民国領である金門島の遠望が期待されたが、あいにくの曇天により目視できなかった。

1月4日はまず泉州市内の媽祖を祭る天后宮を調査。廟の建築物には、開元寺と同じようにバラモン寺院の遺構が使用されている点が興味深い。天后宮のすぐ前は宋代以来の泉州城の南門であった徳濟門の遺跡。現在は発掘・整備されている。その後、泉州市街地のそばに流れる晋江を実見。かなりの川幅を確認でき、直接には海に面していない泉州の港湾都市としての機能の一端を確認することができた。

今回の調査では、以上の如く所期の目的を十分に果たすことができたことをここに報告する。



泉州湾と六勝塔

韓国水利遺跡現地調査記

学習院大学東洋文化研究所助教 村松弘一

本調査は2006年7月におこなった河内平野の狭山池調査を踏まえ、それらの文化・技術が伝わってきたと考えられる朝鮮半島の水利遺跡と都市との関係について池を中心に調査することを目的とした。この作業は同時に東アジア海文明の基盤となった稲作の中国→朝鮮半島→日本列島へとつながる道をたどることにもなる。調査は2006年12月21日から26日までの6日間にわたっておこなわれ、参加者は日本側5名(小山田宏一・呉吉煥・村松弘一・柏倉伸哉・福島恵)、韓国側8名(李文基・禹仁秀・洪性鳩・李志淑・崔垠植・李相勲ほか)であった。

12月22日 大邱→金堤(碧骨堤・金堤水利民俗遺物博物館)→全州(国立全州博物館)

金堤市に位置する碧骨堤を訪問した。碧骨堤は4世紀、百濟王権のもと建設された朝鮮半島で最も古い記載の残る堤防遺跡である。3kmにわたる堤防および石門が残っている。調査の結果、狭山池と同様の敷葉工法であることが報告されているが、堤体の保存がなされているわけではない。この堤防の灌漑対象区を確定することは難しく、防潮堤ではないかとも言われている。ただ、一帯は朝鮮半島南部で最も大きい湖南平野で、碧骨堤が扶余に隣接する一大農業地帯を支える重要な水利施設であったと考えたい。難波宮と狭山池の関係を思い起こさせる。

12月23日 全州→扶余(陵山里遺跡・宮南池・定林寺・国立扶余博物館)→大邱

扶余において、百濟王墓群である陵山里遺跡を訪れた。

陵の西には陵山里寺遺跡・百濟羅城がある。羅城も敷葉工法による。市内に入り、宮南池を訪問。いわゆる苑池である。苑池の文化は中国から朝鮮半島、さらには日本の平城京の東院庭園にまでつながっている。

12月24日 大邱→永川(菁堤)→慶州(大陵園・雁鴨池・国立慶州博物館・掛陵・書出池)→大邱

永川市の菁堤を訪問した。琴湖江の東方にひろがる平野の東に位置する灌漑池で、岩盤でできた高台が狭まった部分に堤防が築かれている。2基の重修碑があり、一つは康熙年間のもの、もうひとつは表面に丙辰銘(法興王23年、西暦536年)、背面に貞元十四年銘(西暦798年)が見られる。その後、慶州で雁鴨池・書出池を訪問した。

12月25日 大邱→尙州(恭儉池)→安東(河回村・芋田里遺跡)→大邱

尙州では恭儉池を訪問し、安東では、近年、韓国で最も古い稲作と貯水池の遺跡が発見された芋田里遺跡を訪れた。

以上、今回の調査では韓国の全羅道・慶尚道の貯水池を調査することができた、今後は、中国安徽省の芍陂の調査や水利技術が広がったルートの調査をおこないたいと考えている。

※今回の調査では李文基教授を中心とした慶北大学校の先生方や大学院生の皆さんの協力を得て、滞りなくおこなうことができた。日本側の調査の意図を十分理解していただき、事前計画をたててくださった韓国側研究者に心から感謝したい。



碧骨堤



菁堤

2007 年度学習院大学アジア研究教育拠点事業 報告会・座談会筆記録（前編）

はじめに

司会（鶴間和幸） きょうは東アジア海文明の歴史と環境プロジェクトの報告会・座談会ということで、これから7時半ぐらいまで行いたいと思います。

報告会といっても、プログラムにありますように、いつも報告会はやっていますから、きょうは自由な発言の中で、自分たちの体験といいますか、やってきたことをお話ししてもらおうということで進めたいと思います。

なぜ、きょうの会を企画したのかと申しますと、東洋文化研究所でも前年度の研究報告、年次報告会というのがありますので、それにならったわけなのです。私たちは新しいプロジェクトを一昨年11月に立ち上げて1年半過ぎたわけですが、まだ先があります。2010年の3月までまだ3年であるわけです。1年半過ぎたところですが、本当にいろいろな動きがこの間でできてきました。調査を行ったり、シンポジウムを行ったり、セミナーをやったり、あるいはテレビ会議が立ち上がったり、それを利用する授業が始まったり、インターオフィスができたり、インターフェローの方が長期滞在されたり、東アジア交流講座というのが行われたり、いろいろな動きがありました。いろいろな動きがあるということは非常にうれしいことですし、きっちり整理はしなくてもいいのですが、何か全体の方向づけだけでも確認しておきたい。それは私がきっちり思っているわけではなくて、参加していただいた皆様のいろいろな声をここで出すことによって、それができるのではないかと思うのです。

ですから、きょうは余り細かい報告はあえて行わないことにいたします。各自がいろいろな活動に参加して、どのように感じてきたのか、自由に意見交換をしていきたいと思います。

また我々、書類を書いた側からすれば、当初の目的がどの程度達せられているのか、また達せられていないのかということも見ていきたいと思います。

当初の目的というのは、東アジア海という1つの舞台を設定して、日本・韓国・中国3国の研究者たちが、お互いに議論して共同調査をすることによって、何か共有

できる文明像を築きたいというところにありました。

もちろん、皆さんの中には「自分は東アジア海文明の海にこだわらずにやっていきたい」という方も当然いらっしゃるし、それはそれで、あくまでも東アジア海文明というのは調査の対象でもありますし、1つの東アジア世界ということを経験してきてきたけれど、そういう地域世界の枠組みの中で中国や韓国の先生方と議論できればいいというふうに柔軟に考えています。この間も東アジアの仏教に関するシンポジウムをやりましたが、それは海とは直接関係ありませんでしたし、東アジアの交流という視点を当てたものも、海が舞台ですけど、必ずしも海に直接焦点を当てたわけではございません。その辺は自由に意見を出していただきたいと思います。

東アジアというのは1つの時代のはやりといいますか、この間、東大の小島毅先生のところで、『東アジアの海域交流と日本の伝統文化』というものを100人規模で立ち上げて、武内先生なども入られています。ここでは「海域交流」というキーワードと、その中で日本の伝統文化が相対的にどう位置づけられるのか、そういう視点でさまざまな研究があります。

それから、九州大学のCOE、この3月で終わりましたが、そこでは『東アジアと日本、交流と変容』というタイトルで共同研究が進められてきました。九州大学というのは大陸に一番近いところで、東アジア研究の1つ拠点になる位置づけです。

そういうところと比べても、私たちのテーマも決して引けをとらない自信は持っているわけですが、その辺、東アジアという世界はどう皆さん考えていらっしゃるのかということも伺いたいと思います。

それから、すでに東アジア世界というのは海をテーマにしたもの、例えば新潟大学では『渤海と環日本海交流』という研究をされてきて、すでにこれは成果が出ております。中心となった古厩先生が亡くなられたこともありますし、「日本海」という呼称問題で、韓国側と随分やりあったようです。環日本海という概念は残されているようですけれども、その辺で現在のところ、新

潟大学はこの問題をもう余り取り上げていないようです。

個人的な研究では、今度6月、うちの史学会の大会で東大の村井章介先生に御報告をいただいて、私も研修の報告ということで海をテーマに報告をしたいと思います。村井先生は朝鮮半島の倭城についての報告をされるということ伺いました。村井先生のお仕事は個人のお仕事で、国境を越えた東アジア海域世界の研究というのを精力的にやられてこられて、国家の枠組みを越えた人々の動き、活動、そしてそこに海域世界という地域が形成されてくるという、そういうことをやられていると思いますが、そういう研究というのは、現在の共同研究の動きとは別に積極的に進められてきたと思います。

ここではいきなり大きな文明観を議論するより、もっと身近に皆さんがこの間気づかれたこと、例えば現地の海や海港を訪れて、どのような印象を持たれたのかというところからお話を伺いたいと思っていますのです。

昨年3月には、最初の調査として、沖縄に行き、上海、大邱と渡ったグループもありました。その後いろいろな調査で中国の運河の調査、泉州を中心とした海の調査、日本海、十三湊等の日本海調査、それぞれ東アジアの海の現地を訪れたわけですが、その辺の印象から少し出していきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

私自身は、この間はサバティカルでしたので、共同に動いたほかに、個人的にいろいろな港を見てきました。その都度、いろいろな感じ方があったのですが、例えば、釜山の町をじっくり歩いてみますと、不思議と神戸など似たような港を思い浮かべるのです。最後、地中海を見たくて、ボローニャに滞在し、ヴェネチアとジェノバに行きました。そうするとヴェネチアというのは、いわゆるラグーンという港でこれはまた十三湊につながるかな、ジェノバは非常に山が迫っているところに港が、平地は非常に狭いのですが、そこに深い海の港がつくられているので、そうすると神戸や釜山に近い。町を歩いていると坂道ばかりなのです。そんな港のあり方というのを、現地を歩いていると、ふと比較したくなりました。

それから、釜山に行きますと、中国と違うのは日本は南にあるのですね。実際、私は対馬海峡を船で渡りまして博多に行きましたが、中国から日本というのは東の世界という感覚で見えていますけれど、朝鮮半島の人たち、特に釜山は「南の海を渡れば日本、九州だ」という、そんな意識で見ているかと思うのです。

ですから、現地を歩いていると、いろいろな感覚的な

印象というのがあるかと思うのです。その辺から、もしどなたかお話しただければ、いかがでしょう。

きょうはテープをとってまして、これは起こすのも大変なのですが、恐らく貴重な意見が出るでしょうから今後の参考にしたい、ただ全部起こして文章にすることは考えていないのですが、一応記録としてとらせていただいています。

どうぞ、自由に7時半までやりまして、その後、懇親会という予定にしております。海を歩かれた方はいろいろいますけれど、泉州でもどこの話でもいいです。

第1部 東アジア海の港について

福島恵 私は港班で泉州に行きましたが、昨年春には港班で台湾の基隆にも行きました。今先生がおっしゃったみたいに、基隆はとても山がちで、そして狭い小さな港だったのですが、泉州は結構広い場所に入り組んだ地形で港ができているという形です。泉州という港は唐末から明代までとても発達します。しかし、その後すたれてしまう理由は、船の大型化とか、港が小さくなってきたこととか、海岸線がどんどん外に出てきて小さくなってきたことだと言われています。とはいえ、泉州の港はさまざまな顔（機能）が見られて、それが時代の要望とか要請に応じて発達したのだということがよくわかりました。私は港班の班長ではないのですが、それが港班の成果だと私は思います。港班といっていますが、海港海運班の成果だと感じております。

釜山も行かせていただいたのですが、やはり山がちで、仁川は逆にまた開けたような、開けてもいないですかね、折衷型なのかな、それも今衛星画像とかがたくさんありますから、何カ所かに行っていれば、地図を見たりして少しずつ想像がつくのかなど、最近目がそういうふう慣れてきたような気がしています。まとまりがなくて済みません。

司会 いいのです。まとまらないことをどんどん出してもらった方が、必ずしも筋のおった議論でなくても、どうですか、同じところに行った方もいらっしやったら、ほかのところを訪れた方はいかがでしょう。

村松弘一 先ほど「仁川は開けた港という印象だ」と、私も詳しくはわかりませんが、かなり埋め立てをして、それで開けたような感じなんですかね、もともと恐らく坂道の多い山がちなところに位置していて、長崎

の坂と港の風景と何となく似ているなという印象がありました。それと比べると上海とかはまた少し違うような、これは全くイメージでしかないのですが。

司会 僕は1人で出かけたのですが、去年の3月に東海大学の海洋科学博物館というところに行ってきました。

例えば香港に行って海事博物館とか、向こうは海事博物館、海洋博物館が少し違うみたいですね。つまり海洋というのは自然科学系の展示をして、海事というと軍事にもかかわってくるのですけれど、そういう海の軍事的な港という視点で紹介したりしているのです。

東海大学は衛星画像を使っているいろいろ調査されていますが、その海洋科学博物館というのは三島にありまして、3月に行ってきたのですが、展示はおもしろかったです。私は文章を書いたのですが、どこにもまだ発表されていないのですけれど。

そこで例えば「日本の海岸」というのを説明しているわけです。そうすると自然科学者は4つぐらいに分類されるというのですね。1つは「遠浅の砂浜の海岸」、これはやはり大きな港としては適さないのでしょうか、それから展示の言葉そのとおりで「切り立った岩石海岸」、3つ目は「入り江の多いリアス式海岸」、そして南方では「サンゴ礁の海岸」という、そういう分類をしていて、すべての海岸がこれに当てはまるんだという、そういう自然科学の側での説明なのですが、我々が海港というものを考えるときに参考になるのかなと思いました。

例えば渤海湾なんか今度調査をしたいと思いますけれど、渤海湾というのは黄河が流れる海ですので非常に遠浅の、土砂がたまっている砂浜の海岸が多いですね。だから大きな港は古代以来、余り発達しない、ですから、天津から山東半島まで、ほとんど港がないですね。山東半島は山東丘陵の突端ですから、龍口とか威海だとか成山頭とか、半島には港が発達します。その対岸が仁川です。渤海を見るときにも、そういう自然景観を見ておく必要があるのかなと思います。

それから、南は連雲港から上海あたりまで、またあのあたりが黄色くなっていますが、かつて黄河が南流したときの遠浅の海岸が続いていますから、そこも余り港が発達していない、福建になると、もう本当にリアス式の海岸ですね。

どうでしょう、ほかの港を見た人、鐘江先生、我々の日本海調査はいかがですか。

鐘江宏之 僕は逆にご案内した立場からすると、感想をお聞きしたいのですが、日本の港は規模が小さいと思うのです。日本海沿岸の港というのは、近代の港になってしまうと岸壁に直接横づけというのが多いのですが、基本パターンというのがあるみたいで、入り江なんですよ。入り江の中に入ってきて、そこの入り江の中が港になって小さい船を泊める。だから風待ちもできるという形で、いろいろな施設が港を拠点にして、港とくっついて役所みたいなものが発達する、外海に対して直接ではなくて、入り江に入ってくる港との関係で立地していくということが多いと思うのです。

だから十三湊もそうなんですよ。古いところでいうと秋田城とかもそうだし、今年考えているような能登半島の付け根の河北潟あたりも港になり得るということで、そういう形が基本なんだと思うのです。

古代はある程度そうなのですが、中世になるとちょっと技術が変わってきたりするのだと思うのですよ。だから、上ノ国の場合などにどうなるか、ひょっとしたら河口の入り江みたいなどころを使ってやったのかもしれないけれど、また違う技術かも知れない。時代差で技術が変わってくる場所もあるでしょう。

聞いた話ですけど、九十九里浜だって、もともとは砂浜の内側、砂丘の内側に潟が発達していて、そこに入ってきて、その中が港だったという話です。だから、早い時期はそういう形で、外海からの避難所みたいな形の港なのかなというイメージを僕は持っています。

そういうつもりで見えていくと、日本海沿岸というのは、同じような地形がずっと続くのですね。何十キロおきに点々と、そこにちょうど港が発達して、何十キロおきに港がという形ですけども、そういう特徴を持って歴史的に展開していったというのは、何か特色があるのではないか、それは韓国や中国に行くときどうなのかという比較がおもしろいかなと思います。

村松 港と港は陸路ではなくて基本的には海を伝わっていく。

鐘江 例えば古代の東北地方の城柵施設というのは、基本的に港-港で日本海沿岸はつないでいるんですね。陸路でつながない。陸路に蝦夷がいるからだという話がありますけれど、そういう形で海路といっても結局海岸線のちょっと先を船で行くというだけです。遠洋航海するわけではなく、海岸線にすごく近いところを海岸を見ながら行くという形です。だから、川ではないですが、

片側に川岸のない川みたいなものですよ、そんな形で航行しているのだと思うのですけれどね。

村松 山東などはそれに近いですか。入り江を利用している。

鐘江 ただ、その入り江も日本海沿岸の場合には、基本的に河口が多いのですよね。要するに深くない、砂州で外海、海と仕切られている。砂丘が発達していますから、砂丘で仕切られて潟になったところを港にする、みたいなね。

武内房司 大きな河川の河口というのは多いですよ。中国の広州も、やはり珠江デルタに位置しています。しかし、港を考えるとときに内陸と切り離すのではなくて、河川と内陸世界とつなぐ中継点として港というのをとらえ返してみると、かなりおもしろくなるのではないかと思います。

広州の場合は、本当にずっと西江をさかのぼって行って、途中で陸路になりますけれど、交通路としては雲南にまでつながるコースに発展し、そこで産地の商品が港まで運ばれ、それが外国交易の1つの重要な商品になるという、そういうネットワークが形成されてきます。水上交通、河川交通と陸域交通というのは結びつくことによって大きな意味を持っていると思うのです。

司会 とすると海港というと海に面した港だけれど、ちょっと海から河川に入った港というのを、それを海港と呼んでいいのか、それとも別の名前があるのか。

武内 ベトナムのホーチミンなんかは全然海港ではないですよ、奥まったところに、河川が随分進んでいったところに交易拠点がありますね。

司会 そうですね、それこそ長江の重慶なんか港町ですけど、あれはどういう、まあ港といえばいいのでしょうか、海の港とは言わないですね。そういうのは川の港とも言わないですよ。

武内 英語だと treaty port として扱われ、まあ港と訳しますけれど、海港ではないのですけれどね。

村松 港というのは内陸でも使いますよね。「海」はつかないかもしれないけれど、安徽省の寿县も寿县港というのがありましたから。

青木俊介 揚州も鎮江も港ですね。

司会 そうだね、鎮江はね。我々、海だけではなくて、中国の黄河、長江、川の下流を含めて東アジア海域を当初から考えていますから、そういう港を注目する必要があるし、中国の場合、運河を内陸に南北に築くわけです

から、運河を航行する船、南から北に物を輸送するということと、それから海を出て沿海で北まで行くという、そういう2つのルートがあるけれど、一たん運河というのができれば、そちらの方が非常に楽に物を直線で運べますからね。

それから、今、南水北調で南の水を北に運ぼうとしています。かつて黄河が北流したあたりも通っています。鄭州から太行山脈の東あたりを通過して北京にまで行く、これは2010年ごろに完成させるつもりではないですか。特に北京は水がないですからね、だから来年、オリンピックのときに大変なんですけど、運河とは違うのですが、南の水を運んでいこうとする。まあ運河にも利用するのかな、どうだろう。

村松 南水北調の真ん中のルートは黄河の古道、昔の古道のところで東ルートというのが、いわゆる古代の大運河のルートをもう1回やろうと。

司会 もう1つあるんだよね。

村松 一番西の方に位置する山越えるルートですね。

司会 3つ。まあ、そういう話ばかりやっていると終わってしまいますけれど、どうでしょうか、海に関して何かあれば。(以下後編へ)

* 本稿は2007年4月26日に学習院大学において開催された2007年度学習院大学アジア研究教育拠点事業報告会・座談会の内容の一部を編集したものです。

清朝の海禁政策の性格

慶北大学校師範大学専任講師 洪 性 鳩
(ホン・ソンゲ)

清朝が中国内地を征服していく過程において、東南の沿海地域に対する統治権を掌握していた鄭成功の勢力は、もともと脅威的な障害要素の一つであった。これを制圧する手段として清朝は、「遷界令」のような強力な海禁政策を採択して、鄭氏勢力の本拠地であった台湾を封鎖した。結局、清朝は康熙 22 年、台湾を平定することに成功して中国内地に対する征服事業を完成し、その後すぐ海禁を緩和して対外貿易を許可した。これは、当時、沿海地域の海外貿易に対する欲求がそれ程に強烈であって、また北方で貂皮の貿易を通じて成長した経験を持っていた清朝がそれ程に対外貿易に対して寛大な立場を取っていたという事実を反映しているものである。しかし、海禁の緩和が海禁の完全な「解除」を意味するものではなかった。清朝も基本的には沿海と海洋の治安を確保し、秩序を安定させるための手段として明代の海禁政策を受け継いだ。これは清朝が海禁の緩和措置を取った以後にも中国人の海外移民と米穀の流出に対し、厳格な制限をしていた事実にもよく現われている。

当時、東南アジアにはすでに大規模な華僑社会が建設されており、これを基盤とする東南アジアと中国の間に貿易が活発に展開されていた。中国人の東南アジアへの進出と華僑社会の建設は中国人が清朝の統制権の外へ離脱することを意味し、これらの活動は、いつでも清朝を中心とした秩序に対する挑戦へと発展する危険を抱えるものであった。さらに米穀の海外流出は、彼らの活動に必要な経済的基盤を提供する恐れがあった。したがって清朝は米穀流出に対しては特別に厳格な制限措置を取り、これを維持するために努力した。しかし沿海地域、特に福建と広東地域の米穀需給の状況はそれ程良くなかった。この地域は土質的にも米穀生産に適していなかったのみならず、明代中期以降の江南地域における社会・経済的発展の結果として形成された地域間の分業関係により、福建と広東地域の食糧状況はさらに悪化した。したがって近隣地域からの米穀運送は地

域経済の生存に欠かせない要素となった。福建・広東のみならず奉天・直隸・山東の地域でも、漕糧の流出と自然災害などによる米穀不足の事態が頻発していた。これに対し、福建と広東では、穀倉である湖広地域の米穀が集中する江蘇・浙江地域からの米穀運送の要求が高まり、奉天・直隸・山東の地域でも海運を通じた相互間の米穀運送の欲求が高くなっていった。

このような問題に直面して、沿海地域の総督や巡撫、地方の紳士・商人たちの多くは、海運を利用した米穀運送を代案として提示した。しかし、清朝は海運の許可が米穀流出の事態につながる可能性がある点を憂慮し、やむを得ず海運を許可する場合でも、なるべく商運ではなく官府の統制の下にある官運を通じて米穀を運送しようとした。だが米穀不足の事態を解決するためには官運だけでは十分ではなかった。さらに、商運を許可すればより経済的に米穀を運送することができるという意見が継続して提起された。そこで、清朝は場合によって商運を許可することもあったが、その際には航海期間と目的地、運送する米穀量と搭載品目を制限する措置を取ることで、米穀の流出という弊害を最小化しようと努力した。

このように、康熙 23 年以後、清朝は海外貿易を許可しながらも沿海と海洋の秩序を維持するための措置として、海外移民と米穀流出の防止を目的とする海禁政策を維持しようと努力した。したがって、明代の厳格な海禁政策が窮極的には中国中心の国際秩序である朝貢体制を維持する手段として機能されていた点を考慮すると、その意味では清朝の海禁が明代に比べて格段と弱体化されたと言えることができる。この点は、日本が正徳新例を通じていわゆる「鎖国」あるいは「海禁」政策を取るようになって、中国・日本間の貿易が日本側で発行する長崎の貿易許可証であった信牌によって統制され、また、信牌に日本の年号を使うことを清朝が黙認していた事実からも分かる。

(翻訳: 崔弘昭)

羅唐戦争の終結について

慶北大学校大学院博士後期課程 李 相勳
(イ・サンフン)

I. 序論

羅唐連合軍は660年、百済を滅ぼして、また668年には高句麗も滅ぼす。しかし、その後間もない間に新羅と唐は朝鮮半島における主導権をめぐる互いに対立することになる。これがすなわち669年から676年まで続けられた「羅唐戦争」である。この「羅唐戦争」については、中国の史書より韓国の史書である『三国史記』により詳細に記録されているが、その記録は一方的に信頼したりまたは一方的に否定したりする速断を下してはいけけないのである。

II. 関連史料の再検討

1. 買肖城戦闘

『資治通鑑』には、春・夏・秋・冬に区分してかならず季節ごとに記事が記載されている。ところが、675年だけは特異で、8月まで毎月記事を記載しながらそれ以後は記事がまったくみえない。

2. 伎伐浦戦闘

Jamieson氏は、韓半島戦線に投入された将帥たちについて記した記録のほとんどに、「羅唐戦争」に関連する記録が脱落していることを指摘している。そしてこのような傾向は、唐に投降した百済流民の場合でも同一である。

III. 唐の軍事戦略変化

韓国の学界はもちろん中国の学界においても、唐の軍事戦略が変化した時期に対する具体的な検討が行なわれておらず、ただ儀鳳(676-679)年間に戦略が転換されたことに関してだけ大体的な見解が一致している。

676年閏3月吐蕃の攻勢以後、唐は親王が主導する大規模な行軍を編成し、677年には府兵がもっとも多い関内道と河東道で兵募を実施し、678年には河南道と河北道でも募兵を実施することになる。676年は、唐の太宗以来朝廷大臣ではない親王を行軍元帥に任命した最初の時期であり、また668年の高句麗滅亡以来特別な募兵無し

に兵力の動員を行っていた唐が、2度にわたって大規模に募兵を行なった時期でもある。

IV. 買肖城戦闘と伎伐浦戦闘の理解

1. 買肖城戦闘

買肖城戦闘を前後した泉城戦闘から道臨城戦闘までの一連の状況が、一つの大きい戦闘を構成しているようにみえる。つまり「買肖城の戦役」は唐軍が撤収する状況ではなく、攻勢のための準備段階と、それに伴う一連の戦闘状況をあらわしているものと思われる。

仮に、唐軍の攻撃が彼らの意図通りに実行されていたとしたら、薛仁貴は漢江の河口一帯を接收し、また李謹行は漢江以北の拠点を掌握することになり、臨津江線に形成されていた唐と新羅の戦線を漢江線に調整せざる得なくなったであろう。675年の買肖城戦闘と前後した唐軍の攻撃の意図は、臨津江線を崩壊させ、漢江線に戦線の再調整を強要しようとしたものと判断できる。

2. 伎伐浦戦闘

唐軍による675年の漢江流域に対する攻撃が成果を挙げなかったため、韓半島戦線での唐の敗色は濃くなってきた。続いて676年閏3月、吐蕃による唐の内地への侵入によって西北戦線が悪化したことをきっかけに、朝鮮半島駐屯軍の撤収が論議され始めたであろう。結局676年11月を前後して唐軍の全面的な撤収が決定され、この撤収作戦の戦場が伎伐浦戦闘であったものとみられる。

V. 結論 — 羅唐戦争後における唐の対応 —

唐は676年11月、改元と大赦を実施している。また同年12月には宰相級の人物を河南道・河北道・江南道に送って巡撫させている。当時唐は吐蕃の脅威が常存している状態であったため、それ以上の新羅遠征を遂行できず、結局、戦争の敗北を認めて現実を直視せざるを得なかったと思われる。(翻訳: 呉吉煥)

東京滞在記

復旦大学中国歴史地理研究中心副教授 楊 偉 兵

学術文化—仕組みから習慣まで—

東京に来て最も感銘を受けたのは、日本の学術交流が発達していることである。各種のプラン、宣伝、公演、後方勤務の支援といったものが相互にきめ細かく周到に準備され、そうした底流がほぼどの時間どの場所においても行われていること、また非常に多くの情報が得られ、穏やかな雰囲気に含まれていることに、感慨を覚えた。

公平に言うならば、中国国内で毎年開かれる学術会議、講座、報告の数は少なくないのだが、「大きいだけで虚しく、本当に得るところのあるものはあまり多くない。ましてや、何かというと大げさな規模となってしまう、幾人かと知り合うことができれば却ってよい方だが、学術それ自体の交流の大部分は割り引いて見なければならぬ。

こうしたことから、私の所属する研究所ではここ数年あまり多く学会を開いておらず、上級機関から要求されて開かざるを得ない場合を除くと、皆は何とか保留にしようとする。北京で長期的に生活したことがないため、学術の中心である首都における学術交流の状況がいかなるものかは分からないが、上海市内の学術活動を東京のそれと比べてみれば、全くレベルが異なるのである。

例えば、東京の大小の高等学術機関は、学術活動があれば必ず大量の宣伝資料やポスターを真面目に制作して各所に送り、また公式のホームページやブログ等ではどれも路線図や地図、会食などの情報を含めて比較的詳細に紹介する。私のいた学習院大学北二号館は文学部研究棟であり、どの階の廊下にも両壁にずらりと各種の学術活動のポスター、広告で埋め尽くされており、中国国内の高等学術機関が廊下を「きちんとして清潔である」よう厳しく求めるのとは異なる。

このほか言及すべきことは、東京の高等学術機関における学術活動の宣伝には専門分野や地位の棲み分けがなく、学科の類別はとて入り乱れており、我々の宣伝が基本的に専門学科の告知であるのとは異なる。これは少なくとも学生を育成するのにプラスになると思われる。

日本の研究者が常に学術交流に参加することを重視しているのは、学術のためだけではなく、さらにそれを職業的

自覚と見なしているためであり、いうなればご飯を食べるのが如く必須のことなのである。

我々はこの点で非常に不十分であり、学会に行くか行かないかは、学術あるいは興味関心をのぞけば、職業的な自覚はない。実質的に日本の多くの学術講演会は、我々の言葉で言えば「非公式」であり、学術論文の提出も求められず、発表の形式や時間はあまり重視されない(後者は講演者の自由裁量に委ねられるという意味であり、限定した時間を与えないという意味では全くない)。さらに、相互の新たな見解、資料と論証方法のやり取りに重きが置かれている。そのため、討論と評議が非常に大きな比重を占めている。周知の通り、中国国内には比較的評議に重きを置いた学会は既にあるものの、そういう学会でさえも討論に占める比重はあまり大きくないのである。

それから、日本の学会は事前に約束して進行を定めているが、報告時間に関しては報告者自身に自由な裁量を与えている。我々の場合だと、あるいは時間を惜しんで十分に報告時間を与えず、あるいは報告者が勝手に進めて予定通りに進まなくなり、会の進行を混乱させてしまうだろう。

当然、この事と開催される学術活動の形式には関係があり、例えば、日本の学術報告は「小会」で行うことが多く、報告人数も一般的に大変少ない。一方、我々は「大会」が比較的多い。実際には、我々が開催する学会の運営方法の一部はとて良く、例えば特定テーマに関する報告の時間は規制されており(復旦大学歴史地理研究所では既に慣例となっており、十五分と規定したならば十五分であり、時間を越えたら直ぐに報告を止めさせられる)、報告形式も重視され(同様に復旦大学歴史地理研究所を例に挙げると、PowerPoint、図表が用いられていると大変良い)、厳しい評議を行う(当然これは研究と講演自体に対してであり、当該研究所で行われる報告で批判がなされなければ不合格である)。

しかし、中国国内の大部分の学会について言えば、一部の良い制度が執行されることはたいへん困難であり、研究者に良い習慣を培ってもらうことは更に困難である。もしかすると、経済的な実力や学術会議の規模が比較的大きいといった理由のために、我々には現在東京都内のような多

くの満ち足りた交流の局面を形成することが非常に困難なのだろうし、それはまた遠出等の条件に一定の制限を受けているためでもあろう。だがしかし、もし我々が学術自体をより重視し、それを任務に対処したり影響(とりわけ社会への影響)を拡大したりするために行うのであれば、質量ともに高く優れた小会を多く開催することが可能になるだろう。

扶桑話仏—中日韓学者の素晴らしい演繹

ある研究者が言うには、唐代の仏教ならば日本で見ろ、宋代のものならば韓国で見ろ、明代のものならば中国で見ろとのことである。2006年11月11日に、学習院大学「東アジア海文明の歴史と環境」研究機構の開いたシンポジウム「隋唐期東アジア仏教の宗派意識」は、つつがなく執り行われ、非常に素晴らしいものであった。日本の研究者によって取り組まれた今回の学会は、東アジア各国の仏教の交流と理解において彼らが重要な地位にあることをはっきりと示している。シンポジウムでの議論と交流が立派なものであったことは、参加者の間の共通認識であり、また私の感想でもあるが、それは次の四点にまとめられる。

一. 中日韓三カ国の国際会議にわずか五名の報告者しかおらず、一人平均一時間ほど講演し、また評議、質問の時間が各四十分余り設けられている。

学術討論には多くの時間を必要とするが、専門の学会について言うと、今回のような形式はもはや非常に得がたく、十分な交流ができた。もともとあった一時間の昼休みでさえも三十分に短縮され、学者たちは昼食をとりながら議論を続けた。午後は七時まで行われ、簡単な立食形式の懇親会においても皆討論し続け、非常に興味深かった。

二. 関係者は優秀で、専門レベルも一流である。どれほどものすごい研究者が雲集したのかを述べることはできないものの、三カ国の報告者はみな名高い研究者であり、その中の三名はまだ壮年で、報告論文は研究の視点、論証、資料、問題意識において十分に斬新であり堅実である。

吉津宜英教授の「中国隋唐時代における大法の形成—教宗、教宗一体の流れを考察して」、新川哲雄教授の「最澄における一向大乘寺の構想—宗派確立の観点から—」、金天鶴准教授の「新羅下代における華嚴宗と禅宗の宗派意識」、および復旦大学中文系陳引馳教授の「中唐文人の仏教宗派意識—柳宗元を例に一」、歴史地理研究所張偉然教授の「中国仏教宗派形態の差異と地域環境」と、どの報告

も非常に素晴らしい。どうやらキーポイントには仏教の議題が密接に絡んでおり、考えるべき点がとても多かった。

このほか特に述べるべき点として、通訳担当の陳継東・林鳴宇両先生のレベルが大変高かったことである。彼ら自身の仏教の素養も深く、通訳について何ら問題なかっただけでなく、当日の会場における彼らの総括が直ちに書き上げた二本の学術論文のごときものであったことは、大変感服させられた。

さらに司会の馬淵昌也教授は、豊富な学識教養と鋭敏な補足能力によって、報告ごとに板書を利用し報告後にはすぐさま評議を挟み、次々と会議を進め、議論の高まりは途切れることがない。今回のシンポジウムで最もご苦勞なされたのは馬淵教授であり、午前中から懇親会まで食事の暇を取っていたのを私は見ていない。会場には東京各地の専門の研究者が出席したので、自然と質疑応答のレベルも非常に高く、報告を今後の課題と論証の面において一層周到で深く掘り下げたものにさせた。

三. 五つの報告をサンプルとして取り上げるだけではなお不十分ではあるが、興味深い現象として、二名の中国人研究者はミクロな点を捉えて精密に研究するのに対し、日本、韓国研究者の三つの報告は比較的巨視的な点から論じていることが分かった。この現象は一般的に逆さまであると考えられているが、思いもよらなかったことに、日本人研究者もまた中国人研究者の行った報告の質の高さを目にし、大部分の参加者が少々意外であると感じたようだ。勿論、日韓の研究者による今回の論文の質と量は言うに及ばない。

四. 優れた研究とは何なのだろうか。報告と評議を聞き終え、散会した後は互いに交流し合い、再び次の点が明らかとなった。すなわち特に優れた問題意識、着実な資料の読解と分析、優れた論証の手法である。

全体的な議論の雰囲気は濃密で熱気に溢れ、謙虚な学術的知識の探求において大きな喜びを感じた。得るところの多かった研究討論者がいたことの外にも、いたく感動させられたことがあった。それはシンポジウムの開催者側、つまり私の所属する研究機関の人々に対してである。懇親会の時に下田さんに会うと、彼は既にお酒で顔が真っ赤になっていた。痛快なことに、馬淵教授は財布を取り出して気前良く大学院生らにおいしいものを買ってあげていた。しかし最も予想外だったのは鶴間教授である。何と自分の研究室から茅台酒を持ってきたのであった！

(翻訳:小武海桜子)

学習院大学図書館「清帝勅誥命書」について

総合地球環境学研究所 承 志

大清国の勅臣の階位を象徴するシンボルの一つとして勅命・誥命がある。満洲語ではこれを「c' yming(勅命)」、「g' aoming(誥命)」と音写するが、これは明らかに漢字音をそのまま借用した呼称である。十八世紀初頭に編纂された満洲語の国語辞典『御製清文鑑』(1708年)巻二によれば「誥命は五品より以上の官を封じる書であり、勅命は六品以下の官を封じる書である」と解釈されている。すなわち、誥命と勅命というのは異なる官品にあたる文書である。

学習院大学図書館に所蔵されている「清帝勅誥命書」は、上記の誥命や勅命の実物であり、清の封贈制度を研究する上で非常に貴重なものである。

この三軸の巻物は、厳密に言えば二通は救命で、一つは誥命である(表)。

1) は、馬駟の父親である馬朝麟に承德郎を贈り、その妻の馬氏を安人に封じた救命である(実物は図1、2を参

照)。2)の内容は1)と同時に1713年に、河南府の糧捕通判であった馬駟に承德郎を授け、妻の賈氏を安人に封じた救命である(実物は図3、4を参照)。3)の実際の内容は、1785年に馬大雄の父親である馬定遠と母親の定氏に賜った誥命である(実物は図5、6を参照)。

大清国時代ではこのような文書は、まず翰林院で作成され、次いで中書科において写されたあと、内閣に送られ、押印したうえで本人に渡すという手順が常例である。さら

図書館番号	題名	年代	言語	形式
334-26	馬超麟勅命	康熙五十二年三月十八日	満漢合璧	軸
334-26	馬駟救命	康熙五十二年三月十八日	満漢合璧	軸
334-24	馬大雄誥命	乾隆五十年正月初一日	満漢合璧	軸

表 学習院大学図書館「清帝勅誥命書」

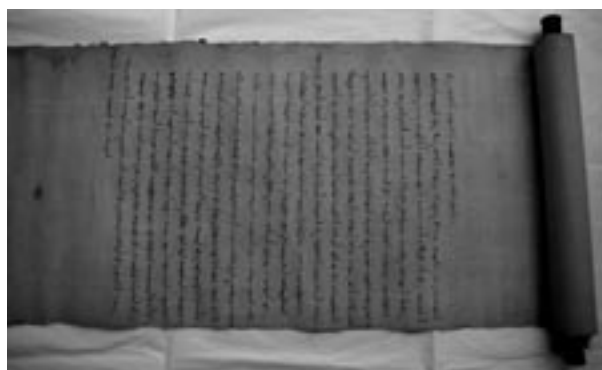


図1 馬超麟勅命—満洲語部分



図2 馬超麟勅命—漢文部分

に『欽定大清会典事例』巻九百四十の記載によると、誥命や救命の現物の製作は、康熙元年(1662)以降から江寧の織造局に任せられ、専管の役人を配置、機械も設置された。誥命と勅命は、必要に応じて工部からあらかじめ文書を織造局に送り、様式に照らして織らせることがこまかく規定されていた。

勅命の場合は純白の綾を用い、満洲語と漢語の「abkai hesei c' yming 奉天勅命」を、昇降する二匹の龍紋様の間に織り込む。誥命の場合は五色或いは三色の紵絲を用い、同じく「abkai hesei ulhibure fungnehen 奉天誥命」の文字を昇降の龍文の間に織り込むのである。一品官は玉軸に鶴錦、二品は犀軸に螭錦、三、四品は金を貼った軸、五品は角軸、すべて牡丹花錦の模様を用いる。六、七品以下は概ね角軸を用い、小團花錦の模様を使用することになっている。

この勅命の実物では規定通り左から右へ、満洲語のはじめに昇降の龍文を織った「abkai hesei c' yming」が、左から右への漢文「奉天救命」の篆字に対応する。勅命と誥命は満漢合璧で書かれたため、軸を左にし、右開き左から満文、右から漢文を書き、二つの文体の末尾に、それぞれ

の年月が合う形になっている。その上に満漢合璧の「救命之寶」(救命)と「制誥之宝」が押されている。

馬駟(1677-1742)は、康熙十六年(1766)に生まれ、陝西西安府長安県出身の監生で、康熙五十二年(1713)三十六才で河南府の糧捕通判に抜擢され、二年後は河南府の河捕通判に移されたあと、雍正十三年(1734)五月に安徽鳳陽府通判に任ぜられた。後に宣化府東路同知になり、乾隆七年(1742)十月二十七日、在職中に病死した。

大清帝国時代の文書システムの中で、誥命と勅命は主に皇帝が臣下に封贈されるときに用いる文書で、それらは誥命冊、勅命冊などの文書の形式と碑文や墓誌など碑石に刻むことがある。官員個人に賜れる絹製の軸物としては誥命や救命も存在する。このような文書体系はもちろん中国史上では古くからあるもので、具体的な官品や規定は前代の大明国の制度を継承したというより、大元ウルスの文書システムに近いと言える。

勅命・誥命の内容にはいくつかの定型句があり、これも時代や官品によって用語や表現は異なる場合が多く見られる。次号では、この三通の文書の録文と和訳を提示して、簡単に紹介することにした。

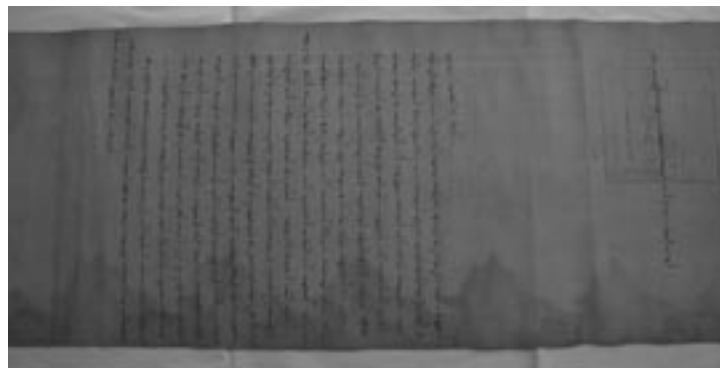


図3 馬駟勅命—満洲語部分



図4 馬駟勅命—漢文部分

日韓交流遠隔セッションの試み

学習院大学大学院博士前期課程 小林彰雄

1 初めに

2006年11月から12月にかけて学習院大学と韓国の慶北大学校をテレビ会議システムでつなぎ、遠隔セッションを行った。学習院大学、慶北大学校の双方から参加した学生による、お互いの国の文化や地理についてのプレゼンテーションが行われた。その様子及び、試みを通してわかった利点や問題点などについて報告する。

2 概要

2-1 第一回日韓交流遠隔セッション

[2006年11月24日実施]

初回は学習院大学から約10名、慶北大学校から約20名が参加した。双方の機材が使用できることを確認した後に、遠隔セッションを始めた。まずは、学習院大学が用意したプレゼンテーションを行った。日本の文化をテーマに、日本のクリスマスとお正月について写真や動画を用いながら紹介した。次に、双方の参加者が自分の名前を大きく書いた紙を見せながら自己紹介を行い、お互いにクリスマスの過ごし方などについて紹介した。

2-2 第二回日韓交流遠隔セッション

[2006年12月15日実施]

二回目の遠隔セッションでは学習院大学が約10名、慶北大学校から12名ほどが参加して行った。前回同様、双方の機材が使用できることを確認した後に、遠隔セッションを始めた。今回は、学習院大学だけでなく、慶北大学校もプレゼンテーションを行った。初めに、学習院大学が用意したプレゼンテーションを行った。二回目は日本旅行をテーマに「GoogleEarth」という航空写真を見ることができるサイトや、現地の写真などを用いて、擬似的に日本旅行を体験してもらった。その次に、慶北大学校が韓国のお正月について、お正月の過ごし方、お正月の服装、お正月の遊びの順で、絵や写真を交えながらプレゼンテーションを行った。お互いがプレゼンテーションを行った後に、前回と同じく双方の参加者同士で自己紹介を行い、自由に質

問などを行った。

3 日韓交流遠隔セッションを通して

初めての試みとなる、第一回日韓交流遠隔セッションでは、テレビ会議システムにはどのような利点と欠点があるのかということに注目した。まず利点としては①映像が非常にスムーズであり、そのため非言語情報が明確に伝わってくる、②教室全体を映すことも、参加者の一人にズームすることもできる、③パワーポイントなどのソフトウェアを利用することができるということが利点としてあげられる。

次に問題点としては、①全員で話すときよく聞き取ることができない、②参加者の注目を集めるのが難しい、③参加者の視点がどこを向いているのかわからない・一致しないという点があげられる。②に関しては、まだ遠隔接触面に慣れていないという問題もあるだろうが、場を共有していないということも原因として考えられるだろう。

また、12月に行われた第二回日韓交流遠隔セッションでは学習院側だけでなく、慶北側からもプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションを相互に行うことは、する側と受ける側、両方の立場になれることから貴重な経験だと言える。実際にプレゼンテーションを受けた感想としては、プレゼンテーション時に使用したパワーポイントは、アクションを起こした際に若干動作がスムーズではなくなることはあったが、気になるほどではなかった。また、今回は韓国語による発表だったため、その内容を直接理解することはできなかったが、音声ははっきりと認識することができ、ストレスなくプレゼンテーションを受けることができた。

まだまだ、この試みは始まったばかりであり、お互いにテレビ会議システムを使って会話をするというところをつかめていない部分がある。しかし、日本と韓国という地理的に離れた場所にも関わらず、このような交流ができていくことは感動せずにはいられない。今後もこの試みを通して、より親密な交流ができればと考えている。

彙報

◇セミナー

第1回：2007年4月14日(土)12:30～17:20
 「中国史에서 環境과 災害 (中国史における環境と災害)」
 会場：韓国清州・忠北大学校 人文大学 視聴覚室
 ＊ 報告者・報告題目については3頁を参照。

◇講演会

①学習院大学人文科学研究所講演会
 日時：2006年12月7日(金)
 会場：学習院大学北2号館10階大会議室
 「旱害・水利より見た雲貴高原の農業環境
 (1659~1960年)」
 (楊偉兵 / 復旦大学中国歴史地理研究中心副教授・
 学習院大学客員研究員)
 通訳：武内房司(学習院大学文学部教授)

②中国史学会第53回学術発表会
 日時：2006年12月9日(土)13:00～15:00
 会場：慶北大学校愚堂教育館101号・102号
 「秦漢都城プランと地理環境—渭水を中心に—」
 (青木俊介 / 学習院大学大学院博士後期課程)
 「画像磚から見る魏晋期酒泉の牧畜と環境
 —嘉峪関新城古墓群を中心として—」
 (市来弘志 / 学習院大学非常勤講師)

◇フォーラム

第8回「東アジア海域の航海世界」
 日時：2006年11月15日(水)18:00～19:30
 会場：学習院大学北2号館6階人文科学研究所会議室
 「近世東アジア海域における漂流問題」
 (劉序楓 / 台湾・中央研究院
 人文社会科学研究中心副研究員)
 参加者：16名

第9回「自然災害と東アジア海文明」
 日時：2007年1月12日(金)17:30～19:00
 会場：学習院大学北2号館6階人文科学研究所会議室

「災害の考古学・環境の考古学」
 (阿子島功 / 山形大学人文学部教授)

参加者：21名

第10回「東アジア国際関係の基本構造」
 日時：2007年1月15日(月)18:00～19:30
 会場：学習院大学北2号館10階大会議室
 「清代の海禁政策の性格」
 (洪性鳩 / 慶北大学校師範大学専任講師)
 コメント：井上徹(大阪市立大学大学院文学研究科教授)
 参加者：35名

第11回「東アジア海域交流の諸相」
 日時：2007年4月11日(水)18:00～19:30
 会場：学習院大学北2号館6階人文科学研究所会議室
 「羅唐戦争の終結について」
 (李相勲 / 慶北大学校大学院博士後期課程)
 通訳：呉吉煥(東京都立大学大学院博士後期課程)
 参加者：19名

◇セクション・スタディ・ミーティング (SSM)

第9回：2006年11月22日(水)18:00～19:30
 於北2号館6階人文科学研究所会議室
 「朝鮮の対外使節『燕行使』の経路と日程
 — 17世紀後半以降を中心として—」
 (島暁彦 / 東京大学大学院博士後期課程)
 「新羅下代の渡唐留学と崔承祐」
 (崔弘昭 / 慶北大学校講師・学習院大学客員研究員)
 参加者：15名

第10回：2007年1月24日(水)18:00～19:30
 於北2号館6階人文科学研究所会議室
 「港班2006年度中国調査報告—泉州・アモイ—」
 (福島恵 / 学習院大学大学院博士後期課程)
 「思想と知識の交流班『多久聖廟調査』」
 (倉嶋真美 / 学習院大学大学院博士後期課程)
 参加者：15名

第11回：2007年2月21日(水)18:00～19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「韓国水利遺跡現地調査報告」

(村松弘一 / 学習院大学東洋文化研究所助手)

「上海・復旦大学留学記」

(放生育王 / 学習院大学大学院博士後期課程)

参加者：14名

第12回：2007年3月14日(水)13:00～15:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「清代前中期雲貴地区政治地理与社会環境」

(楊偉兵 / 復旦大学中国歴史地理研究中心副教授・
学習院大学客員研究員)

「雲南における『開発』と『環境』」

(野本敬 / 学習院大学大学院博士後期課程)

参加者：13名

◇座談会

2007年度アジア研究教育拠点事業報告会及び座談会

日時：2007年4月26日(木)18:00～19:20

会場：学習院大学北2号館10階中会議室

参加者：22名

◇出版

후쿠 히로미 (福寛美) 『『오모로소오시 (おもしろさうし)』에 보이는 북방적 문화 요소 (『おもしろさうし』に見られる北方的文化要素)』

『歴史教育論集』第38輯、2007年2月

최은식 (崔根植) · 이문기 (李文基) 「아시아연구
교육거점사업 『동아시아해 문명의 역사와 환경』 - 2006
년夏季 史跡調査記 -」 同上

鶴間和幸編著 『黄河下流域の歴史と環境』

—東アジア海文明への道—

学習院大学東洋文化研究叢書、東方書店、2007年3月

随想

東アジア海にまたがる「橋」—インターネット

テレビ会議システムを使った授業—
学習院大学大学院博士後期課程 放生育王

2007年6月1日、学習院大学の講義：『東アジア世界—東アジア海文明の歴史と環境—』にてインターネットテレビ会議システムを使った授業を行った。

午前9:00(北京時間)、復旦大学中国歴史地理研究中心の朱毅氏にお手伝いいただき、機器の設置・接続の確認を行う。中国から海外へのインターネット回線はまだまだ不安定要素があるため、午後の本番に備えて事前に接続可能かしっかり確認しておく必要がある。

午後1:30(北京時間)、今回の中国側担当である復旦大学中国歴史地理研究中心の朱海浜副教授がいらっしゃる。日本側担当の学習院大学東洋文化研究所・村松弘一助教が今までの現地調査をふまえた『東アジア海をわたる神々—関羽・媽祖』の題目で講義することになり、関羽信仰を専門に研究している朱副教授にも参加することになった。100名程の学生が聴講することを伝えると朱副教授は少々驚いたようだが、日本の学生から活発な質問が出ることを期待していた。

講義は初めての試みにしてはうまくいったと言える。村松助教が最初に全体像を講義し、その後で朱副教授が民間信仰、とくに関羽信仰について詳細を講義した。最後には学生から出た質問にも丁寧に回答していた。このように、日本にいながらにして海外の専門家のお話をうかがうことができるのは非常に有意義である。もちろん直接面会して交流することが理想的であることは言を俟たないが、実現するには多くの金銭・時間が必要となる。補助手段として、このようなインターネットテレビ会議システムを使った学術交流の評価を積極的に行っていく必要は充分にある。

本講義については復旦大学歴史地理研究中心も関心を示しており、記録用の写真撮影がなされたことを付け加えておく。

最後に、本講義のためにご協力いただいた復旦大学中国歴史地理研究中心ならびに朱海浜副教授を始めとする方々に改めて感謝したい。

※当日の写真は以下のWebサイトにて確認できます。

学習院大学上海学術交流中心 blog

<http://gakushuin.exblog.jp/>



仁川の中華街にて(2007年4月15日)。前列右より森部豊・下田誠、後列右より村松弘一・濱川栄・鶴間和幸・市来弘志・福島恵。以上、平成19年度第1回東アジア海文明セミナー報告者。

編集後記

韓国にて。4月15日、私たちは月尾島(ウォルミド)から永宗島行きのフェリーに乗りました。

天候は今ひとつ、しかし多くのカルメギ(갈매기、カモメのこと)が私たちを迎えてくれました。中華街では仁川発祥といわれるジャージャー麺こと、チャジャンミョン(짜장면)を食し、唇を真っ黒にしなが、港町仁川を体感しました。『ニューズレター海雀 Umi-Suzume』第3号もご覧ください。(M.S.)

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

「東アジア海文明の歴史と環境」

ニューズレター海雀 Umi-Suzume 第3号

発行編集：学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

Tel：03-3986-0221（内線5743）Fax：03-5992-9218（人文科学研究
研究所）

e-mail：asia-off@gakushuin.ac.jp

HP：<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

発行日：2007年6月25日

